viewpoint 51
THE SAISON FOUNDATION
セゾン文化財団ニュースレター第51号
2010年6月10日発行
http://www.saison.or.jp
財団法人セゾン文化財団
The Saison Foundation Newsletter — 10 June, 2010

目次

菊池領子◉中国のインディペンデントアーティストとの共同作業の試み
——21世紀日中舞台芸術交流プロジェクト—— p.01
北村明子◉劇場から遠く離れて p.05
Morishita Studio Report p.10

Article—❶

中国のインディペンデントアーティストとの共同作業の試み
——21世紀日中舞台芸術交流プロジェクト——

菊池領子
Ryoko Kikuchi

中国との10年——インディペンデントな動きへの関心

初めて中国を訪れたのは1997年4月のこと。いまや高層ビルが林立する北京も、まだ中心部の道路整備が少しずつ進み始めたばかりの頃だ。

当時、8年に渡り在籍した企業を離れた私は東京へ戻り、本腰を入れて中国語を学び始めたところだった。当初は、留学、それも長期留学など夢にも思っていなかった。それが、さまざまな縁で、翌夏の短期留学を契機に、99年2月から1年間の留学に踏み切ることになり、延長に次ぐ延長。そして、タイミングよく、03年の卒業直後に、平田オリザ氏の協力を得て、李六乙[リー・リュウイ]の『非常麻将』の日本公演プロデュースを実現することができた。

セゾン文化財団の助成が決まったのは、それから4年後。07年の春のことである。06年秋に、セゾン文化財団から依頼を受け、中国舞台芸術に関するレクチャーを行ったのが申請の契機となった。思えば、07年は最初の中国滞在から10年の節目の年。中国を往復した十数年の集大成ともいえるプロジェクトであった。

99年に中国で舞台を観始めて以来、私は一貫して、中国人アーティストのインディペンデントな活動や、民営芸術団体、公営劇団の民営化といった動きに関心を示してきた。しかし、今回のプロジェクトを手掛けるまでは、中国の作品を日本に招聘する企画に留まり、中国で日本の作品を上演することはなかった。日本人である私にとって、日本での影響を考える方が容易であることはいうまでもないが、社会主義中国との間においては、外国人が中国国内で公演を行うより、彼らを招聘する方が実現しやすいことが主な理由である。

その点、この3年間は、取り組みを発展させるための非常に貴重な時間であった。現代日本の演劇やダンスを、効果的に中国に紹介する企画。更には、日中コラボレーション作品の製作。難易度が少しずつ上がるが、単に上演したというだけでは意味がない。中国におけるインディペンデントな活動の活発化に作用すると同時に、日中イン

ディペンデントアーティストの交流を促進させ、ネットワーク構築へとつながることを目指し、演劇、ダンスの2分野においてプロジェクトを推進した。一緒に取り組んだのは、劇作家・演出家の顧雷[グー・レイ]、そしてダンサー田中泯の両氏である。

個人に焦点を当てた新たな交流スタイルの模索

「21世紀日中舞台芸術交流プロジェクト」という名称は、20世紀とは違う、新世紀の交流スタイルの構築を行いたいという気持ちの表れだ。社会主義の中国では、舞台芸術活動も、多くが政府の傘下の組織で行われている。海外との交流も、政府機関を窓口に行なわれてきた。交流形式や発言が官僚的なスタイルになりやすいのは、そのせいである。しかし、経済発展が進み、個人が力を持ち始めると、中国でもアーティストの自主製作が始まった。以前、李六乙の『非常麻将』を招聘した理由のひとつは、それが彼の自己投資によって製作された作品であり、所属する公営劇団の作品ではなかったからである。日本の舞台芸術界が個人をベースに成立している以上、個人対個人の交流を促進させたいと当時から思っていた。それでこそ、双方、個人として発言し、本音のつきあいが出来るからだ。

しかし、中国と日本ではもうひとつ大きな相違点がある。中国では、舞台芸術の専門の養成機関があり、少数先鋭の教育がなされている。そのため、卒業生を職業演劇人とみなし、専門に学んでいない人をアマチュア演劇人として区別する。彼らのそうした考え方やプライドの高さが、時に海外との交流においても障壁となる。

組織の大小や肩書き、学歴ではなく、個人と個人が、相手を尊重し合う、対等な関係での交流、共同作業はできないものだろうか。真摯に向き合う中から、新たな考えや試みが生まれ、WinWinの関係になれたら。そんな思いから、公営劇団や政府機関、または、そこに所属するアーティストをカウンターパートとせず、これまでに出逢ったインディペンデントの立場で活動する人達と取り組むプロジェクトを企画することにした。

インディペンデントな国際プロジェクトのリスク

しかし、それは、一歩間違うと、「非合法」の事業となり、政府から中止命令が出る恐れがある。そのリスクを最小限に抑える仕組みを考えなくてはならない。

そして、もうひとつの課題は資金である。経済格差が大きな頃、日中交流の公演は、日本側が主に資金を負担して行うケースが多かった。中国経済が目覚しい発展を遂げる今、その改善も対等な交流に必要な要素と考えているが、インディペンデントアーティストと組むことは、即ち資金の問題が生じるということで、それを踏まえた事業構成が必要となる。中国では個人に対する助成制度はない。ならば、こちらが潤沢な資金を確保しておけばいいかというと、そうはいかない。助成金を主要財源にしたプロジェクトであり、制約が多い。助成金ごとに用途指定や対象経費における割合の上限等の規定がある上、入金も事前振込みとは限らない。複数の助成金を申請した場合は、結果の出る時期が異なることもある。こうした環境において、一定の予算を最初から確保するのは非常に困難がある。この3年で相当数の助成金を申請したが、セゾン文化財団の助成金は、最も自由度が高く、プロジェクトの実現、発展を促進する作用がある。今後、日本国内に存在する各種助成金が、より用いやすいものに改善されていくことを切に望む。特に、国際プロジェクトは事前準備に時間と費用を要する。その点を考慮した改正が必要である。また、事後清算とするならば、つなぎ融資制度も必要だ。地域によっては役所が融資制度をもつところもあるようだが、私の周辺ではそのような制度は見当たらなかった。そこで私は、あるNPOバンクのお世話になった。舞台芸術活動への融資は初めてだったそうだ。英断に感謝している。

演劇

顧雷と初めて面識を持ったのは05年の春だった。話をするうち、職業演劇人のプライドは高く、大学生演劇祭で高評を得ても、なかなか認めてもらえない苦悩があることを知った。最初に彼を紹介してくれたのは、大学生演劇祭のディレクター的機能を担っている人物だ。かねがね中国演劇に対する見方が私と一致するところがあり、06年に、顧雷の演出作品を共同製作する企画を提案すると、即座に賛同してくれた。そして、大学生演劇祭の主催者である北京戯劇家協会の秘書長と話をし、07年に北京で開催する予定の演劇祭で作品を上演することにしたのだった。会場は公共劇場の中でも先鋭的な作品を上演するナインシアターのTNT劇場。非合法になる恐れはない。

07年『海と日傘』

当時、中国の都市部では小津安二郎が注目を集め、演劇では「静かな演劇」といわれる作風への関心が寄せられていた。そこで、1年目は、松田正隆氏の代表作『海と日傘』を中国語に訳して上演することにした。中国語に訳された現代日本の戯曲はそう多くはない。新たな表現を求めている20-30代前半の若者を中心に話題を呼んだ。松田氏の主宰する「マレビトの会」の新作『cryptograph』の中国巡演と時期を合わせ、相乗効果を図った。

続いて2作とも上海で上演した。場所は倉庫を改装した100席余りのダウン・ストリームガレージ(中国語名:下河迷倉)。NGOシアターゆえ上演許可がなく、無料公演しかできない。しかし、公共劇場では観ることのできない実験的な公演が行われるという評判が広がり、20代から30代の若者を中心に固定客がつき始めていた。海外から来る作品は大抵満席になるが、国内の作品はどうだろうと劇場が心配していた。結果は満員。これを契機に、他都市か

『海と日傘』(2007年12月 北京 ナインシアター・TNT劇場) Photo: Li Yan

『十人の夜』(2009年3月 東京・森下スタジオ) Photo: R PRODUCTION

ら作品を携えてやって来る中国のインディペンデントアーティストが増え始めた。

長期計画の難しさ

中国と長期計画のプロジェクトを行うことは非常に難しい。政府の影響力が強いだけではなく、人間関係のあり方、そしてその変化の速さも大きな要因となっている。

中国では、詳細に打ち合わせすることがほとんどなく、大きな事柄だけ押さえて物事を進める傾向にある。人間関係は、緩やかな連帯関係で結ばれていることが多く、それぞれの思惑で事が動いていく。そのため、意図的でなくとも、相手側からすると、利己的で不愉快と映る行動がなされがちで、それが原因で人間関係が変わることがよくある。今回の北京では、当初一緒に話をした3人の中で最も強い動機を持つ、つまり創造の場を切望していた顧雷は、最後までやり通したが、あとの2人は2年目以降不参加となった。北京戯劇家協会の表向きの理由は、四川大地震や建国60周年記念等の影響だ。だが、実際は様々な要因が絡んでいたと思っている。

上海でも同様であった。劇場オーナーと芸術監督の関係が、ある時点で一変したのである。元来、彼らの役割や権限は不明瞭なことが多く、プロジェクトを遂行していくのが大変なのに、こうなるとプロジェクトに及ぼす影響は甚大だ。

対処方法はといえば、どんな時にも個人的にコミュニケーションがとれるよう、各人と良好な人間関係を築くことだ。だから、これまで私は何度となく中国に滞在し、各方面の人達と接してきた。しかし、時間も資金も無限ではない。頭の痛い問題である。

08年–09年『十人の夜』

『十人の夜』のプロデュース経緯は、特定非営利活動法人日中演劇交流話劇人社の機関紙『幕』の第69号（2009.10.15）に記しているので、機会があったらそちらをご覧頂きたいと思う。

これは、顧雷の作・演出で、現代都市をテーマに、ワークショップオーディションを通じて選んだ日本の役者、そしてスタッフと共に東京で制作した作品である。北京戯劇家協会の参加がなくなり慌てたが、都民芸術フェスティバルの助成が決まった。文化庁、セゾン文化財団（EU・ジャパンフェスト日本委員会との共同支援）を合わせ3つの助成である。日中共同制作だからこそ実現したといえる、中国人インディペンデント演劇人の作品で、顧雷にとって初のオリジナル作品ともなった。

09年3月に森下スタジオで上演した後、4月下旬から5月までの15日間、中国3都市（北京・上海・深圳［シンセン］）を巡演した。北京大学の小ホール、他の2都市は公共ホールで行い、いずれも07年とは異なる空間だった。

それらをセッティングするカウンターパートとして私が選んだのは、中国演劇界に常に一石を投じる存在であったインディペンデントのプロデューサーである。以前、大学生演劇祭を仕掛けた人物でもある。直接、私が各劇場とコンタクトをとり、巡演を組んでいく選択もあったが、中国人の友人達とも相談した上、今回はプロモーター的存在として彼を間に挟むことにした。直前の3月に東京公演があり、とても対応しきれないという判断だった。この判断は正しかったと思うが、問題点もあった。

共同作業の難しさと巡演の意義

第一に、各劇場の進行状況がよく見えなくなったことである。事前に上海、深圳に下見に行くと、資料が来ていないので、PRが出来ないと言われる。仕込みのため現地入りすると、数日前にチケットが発売されたらしく、PRの行き届いていないのが目立った。関係者の話では、中国のプロデューサーは大きなスポンサーがつく公演は周到に用意するが、こうした交流事業はあまり重要視しない傾向にあるようだ。資金的メリットがないからだろう。中国巡演については、申請していた文化庁や国際交流基金の助成金が不採択で、先方の負担が大きくなったため、やむをえないとも思うが、得難い機会であるだけに少々残念に思う。

第二点は、作品製作のプロデューサーと公演制作プロデューサーの区別が曖昧になってしまったことだ。中国では、主催者が用意した原稿を元に記事を書く習慣がある。ほとんどのメディアで、私は日本公演の資金を負担したプロデューサー、中国公演の資金は主に中国のプロデューサーが負担したと書かれていた。両者とも公演のプロデューサーという印象だ。なるほど、読み手にはわかりやすい。しかし、気分はよくない。顧雷が独自に製作した作品を私が日本に招聘したのなら話はわかるが、今回は製作費を全て私の側で負担し、脚本段階から一緒に創ってきたのだ。そして、この認識の違いが主な理由だと思うが、記者会見も夕食も顧雷だけに声を掛ける。原因を考えると、プロデューサーの役割の違いが思い当たった。また、大学生演劇祭の発起人として、顧雷に対する思いもあったのだろう。その点、深圳の劇場担当者は私の役割をわかっていて、下見に伺うと早速記者を手配し、それから、公演に対する劇場側の考え方を説明した上で、集客方法や状況を伝えてくれた。彼らとのコミュニケーションは非常にとりやすい。改革の風は南から吹くといわれる中国。新興都市ゆえでもあるようだ。

同じ名称の仕事をしていても、業務内容や仕事の仕方は様々である。短期間でそれなりの規模のプロジェクトを行う場合は、コミュニケーションが十分ではなく、誤解が生じがちだ。詳細まで文書化して打ち合わせるとなると、手間も費用もかかるため、簡単な契約のみに留めることが多いが、今後は必要になるかもしれない。もちろん最も必要なのは、時間をかけてつきあうことだ。

いろいろ問題点も多かった『十人の夜』だが、東京から始まり中国の異なる文化の3都市で巡演出来たことは、作品を成熟させる意味で大変有意義であった。出来れば、日本巡演も実現したかった。日本の公共劇場の実情は漏れ聞く以外よくわからないが、プロジェクト単位で助成金を申請する私のようなインディペンデントな立場と異なり、年間予算がある利点を活かせないものだろうかと思う。

舞踏

当初の計画では、演劇だけを行う予定だった。これだけでも相当なボリュームである。当時、私はダウン・ストリームガレージの芸術監督とOM-2の公演の話を進めていた。OM-2の表現の個性は中国の公共劇場には合わない。内容によっては審査が通らない恐れもある。そこで、NGOのダウン・ストリームガレージを選んだのだ。近年、中国では時代の変化に伴い、既存の演劇ともダンスともつかない新たな身体表現を追求する若者が増えている。ダウン・ストリームガレージに集まる観客は、とりわけそうした傾向にある。

貴州省での最後の場踊り（2009年3月 季刀村）
このページ3点とも Photo: R PRODUCTION

場踊りに見入る村人達（2009年3月 北京市南皋村）

今はなき北京の南横街にて（2007年10月 前兵馬路）

そこへ「舞踏に関心がある。田中泯の踊りをここで出来ないだろうか。中国に関心を持っていると噂で聞いたんだが。」という相談を持ちかけられた。06年の頃、舞踏というジャンルは、中国ではまだほとんど知られていなかった。かつて香港に近い広州で公演があったようだが、時期が早すぎて理解を示した中国人はそう多くなかったという。今なら機は熟したといえる。こうして泯さんとのプロジェクトが始まった。酒蔵の前の桜の下で踊る泯さんに出逢ったのは97年春だったと思う。当時のアルバムをめくってみた。

07年 上海・雲南省麗江・北京

当時、泯さんは劇場での踊りに区切りをつけ、積極的に野外の場踊りを行っていた。そして、泯さんの当時のプロデューサーから、上海だけでなく雲南省へも行けないかと持ちかけられた。彼らの知人が運営するアートスタジオがあるという。こうした経緯を踏まえ、中国最先端の都市上海と、今もなお昔ながらの生活を保つ雲南省の少数民族ナシ族の村という対照的な場所と泯さんのコラボレーションの企画を立てた。続く08年はオリンピック開催地の北京で、北京現代舞団に所属する少数民族出身のダンサーと、09年は少数民族村での場踊りまたはアジアの現代舞踊の踊り手とのコラボレーションへと発展させたいと考えていたが、企画に変更はつきもの。北京現代舞団から彼らの主催するダンスフェスティバル（フェスティバルは実現せず、単独公演として上演）に舞踏ダンサーを招聘したいのだがと相談されたのを契機に、08年の顔合わせ、下見にもなると考え、07年に北京を加えて3都市を巡ることにした。

最初の訪問地、上海のダウン・ストリームガレージは、200%を超す来場で、劇場にとって最高の入場者数となった。中には正座をして食い入るように見る若者もいる。演劇研究者からは、演劇よりも雄弁という評があった。ワークショップも好評で、09年の夏、上海の若者が白州のワークショップに参加した。「中国では学べないことがたくさんありました」と後日感想が私の元に届いた。仲間達と路上でパフォーマンスを試みたとも聞いている。続く麗江は、4箇所での場踊り。春に私が下見に訪れた時とは違い、秋の拉市[ラシ]海は水を満々と湛えていた。鳥の音と地元の子ども達の無邪気な声が響く中、水神が現れた。そして、北京ではロープを巧みに使った、挑発的とも取れる踊り。北京の観客のやや高圧的な態度がそうした表現へとつながるのだろう。最後は、解体中の古い町並みでの場踊り。09年11月に北京を訪れた際行ってみると、そこは既に跡形もなくなっていた。一期一会。

09年 北京・貴州省

08年はオリンピックの影響で、各地のイベントが規制されていた。07年は咎められなかったが、本来路上での踊りは許可が必要である。08年は見送り、年度内最後の3月に行うことにした。カウンターパートは、北京現代舞団を変更して、引き続きダウン・ストリームガレージ。貴州に彼らの拠点がある。現地の様子、農業を営む泯さんの生活から、テーマとして、貴州の農村を舞台に行う稲作文化と踊りの探索を据えることを考えた。そして、ダウン・ストリームガレージのレジデンスアーティストであるドキュメンタリー映画監督による記録撮影。しかし、彼らが薦める場所を08年4月に訪れてみると、いまひとつピンと来ない。上海から一晩かけて列車に揺られて来たのに、漢族化の進んだ街という印象なのである。また、映画監督も腹部の大きな手術をしていて、奥地には入れそうもない。そのまま彼らと組むか、企画を変更するか、悩んだ末、袂を分かち、再度企画を練り直すことにした。チャーターバスで奥地に入り込み、侗[トン]族、苗[ミャオ]族の村を巡る企画で、現地の手配を旅行社に依頼した。村によっては事前に許可をとらないと入れない。が、普段彼らが扱う観光旅行とは趣旨が違う。私が提示する場所は、時には山道が崩れて通行できなくなるような奥地で、普段彼らも行かない所なのだ。結局、プランを大きく3回修正してもらい、山道を10時間以上バスに揺られて行く、いささか強行軍の旅のプランが出来上がった。

貴州に行く前には北京に1泊する必要がある。そこでも場踊りの時間がとれる。考えた末、昔北京で歩いたことのある庶民の生活の息づく町並みで、泯さんに踊ってもらいたいと思ったが、そこは市の中心部で人通りも多く難しい。そこで、当時一緒に歩いた若手演劇人に、似た場所を提案してもらうことにした。彼が提案してくれたのは、都心部と農村部をつなぐ境界の村。下駄を履き短パン姿の泯さんが踊りだすと、徐々に人だかりが出来る。「あの人どうしたの?」「日本人も大変だなぁ。こんな風にしないと食べていけないのか。」などと様々な感想を口にしながら、楽しそうに見入っている。道はすでに塞がっているが、皆おおらかだ。文句も言わず、スピードを落としながら道をすり抜けていく。気がつくと私の隣に立っている男性が「あそこにいる公安の腕章をつけた人のところに行って、もうすぐ終わるからと言ってきた方がいいよ。」言われたように一声かけると、OKと頷き去って行く。なんという寛容さ。踊りが終わると「あんた、いくつだい?すごいねぇ、最高!」と肝っ玉母ちゃん風の女性が泯さんに声をかけた。

異文化の中で

不安の大きかった北京の場踊りを終え、貴州でも少数民族の人々の穏やかな対応に安心していた頃、思わぬ出来事に遭遇した。風情ある家屋の入り口で踊っていた時のことである。同意を得ていたにもかかわらず、主が烈火の如く怒り、公安や近隣住民と共に抗議し始

めたのである。最初は、旅行社が対応してくれていたが、埒があかずに私の所へ来た。無許可だからいけないのだと思い、帰国できなくなったら一大事と、話を聞いていると、どうもそうではない。年配の主には箒をもって家の前で踊る姿が鬼に見え、縁起が悪いというのだ。中国人でも都会育ちの人にはわからない感覚だそうだが、田舎出身の祖父母がいる中国人は理解できるという。それまであまりにも順調で、自分が異文化の中にいることを忘れていた。また、そうした場面を想定しての対策が不足していた。次の機会にこの経験を活かしたい。

帰国後、3年目の企画を考えた。この2年を振り返ると、カウンターパートとの取り組みを前提にすると、内容が犠牲になりかねない。しかし単独主催で行って、地震やトラブルに見舞われた場合、外国人の私だけでは対応できかねることがある。また、国際交流プロジェクトの意義はどうなるのだろう。直感で動くところのある私は、暖かな日差しを感じると、細かいことは置いておいて、まずはやってみようと思ってしまう。しかし、それでいいのか。今回はかなりの時間をかけて問い直した。そして、3年目の見送りを決断した。長期的視野で考えた結果である。縁があれば、より良い機会があるはずだ。

今後の方向性

3年間を振り返ると、社会体制は異なるが、日本も中国も向かっている方向はほぼ同じように思う。インディペンデントな立場の者が、ノウハウとフットワークの軽さをもって、公共劇場や組織と組んでプロジェクトを推進していく時代になりつつある。そうした動きが促進されれば、個別にプロジェクトを行うより効果的だ。各公演主催者は単独で作品を製作するより資金的に楽になる。作品にとっては上演回数を増やすことが出来、製作資金の回収にもつながる。特徴のある企画は回を重ねれば、固定客もついてくる。今後、中国とのプロジェクトを発展させるには、双方にこうした環境が不可欠だ。単独の単発事業では限界がある。

中国とのプロジェクトは変更、キャンセルのリスクが高い。まして今回はインディペントアーティストとの取り組みで不確定な要素が多かった。セゾン文化財団ならではの温かいご支援を頂き、心より感謝申し上げます。

photo: R PRODUCTION

菊池領子（きくち・りょうこ）

1966年足利生まれ。アートディレクター＆プロデューサー、R PRODUCTION主宰。99年から約5年間北京に在住。北京語言大学にて中国言語文化課程を専攻する。都市再開発プロジェクトをマネジメントした経験と、中国滞在で得た舞台芸術の人的ネットワークを活かし、日中を中心に東アジアの舞台芸術交流を推進している。特に中国の新たな潮流であるインディペンデントアーティストとの先駆的なプロジェクトを行っている。03年に北京の演出家・李六乙の代表作『非常麻将』の単独公演を東京、伊丹にて実現。04年には芸術見本市2004東京の中国現代舞台芸術の企画を担当。07年 は演劇、ダンスのみならず、上海の若手ジャズバンドの日本ツアーをプロデュースした。著書に中央大学教授、飯塚容氏と共訳した李六乙の「非常麻将」（『中国現代戯曲集』第5集 晩成書房）、「知られざる中国 舞台芸術最前線」（『Performing Arts Network Japan』国際交流基金）等がある。

http://www.rproduction.com

Article—❷

劇場から遠く離れて

北村明子
Akiko Kitamura

ダンスというフレームから離れて

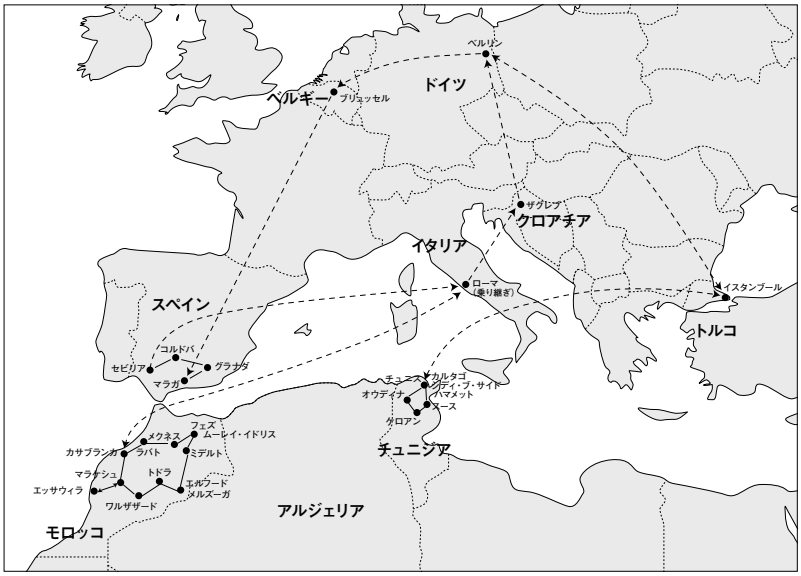
劇場でのダンス作りが思考の中心にあった生活から、旅先でゆっくりとその街の日常に溶け込みたい、と思うようになったのは数年前からだった。海外を旅することにはある意味慣れていたと思う。公演や現地滞在の振付活動を通して、欧州、北米、南米、東欧、アジア諸国、いろいろと回ったが様々な国で現地の関係者と関わっていくことはごく普通の旅では味わうことのできない貴重な経験だった。ダンスという共通枠の中では言語の壁はそれほど気にならず、舞台を成就するという共通の目的のもとだいたいがなんとかなってしまうものだ。そんな状況の中で、目的のある旅に、私は長い間慣れていたのだと思う。海外では予想以上に自分の思考回路が育てられ、ずいぶんと図太くなった。それと共に、「目標を果たす」「効率よく作業をする」というキーワードも常に念頭に置かれるようになった。今でもそうした意識は他者を巻き込む以上重要なことだと思っている。しかしこの数年、それが同時に変化の妨げになっているようにも感じられていた。

旅へのひきかえ券

「このメンバーで作品をつくれるのは最後かもしれない」という直感のもと行なった国内自主公演を終えた後、介護状態が長く続いた父親との永遠の別れがあった。家族同様に長い間共に踊ってきたダンサーもダンスを続けていくかどうか悩んでいた。物事は変化する。自分は変化しているのだろうか? 整理する時期がきている、と感じていた。秋から冬にかけてフランスのプロジェクトが控えていたが、ソロ出演なのでこれはどこにいても振付の構想は立てられる。迷っていたのはイギリスのカンパニーから来た再度の振付依頼だった。受ければ、夏の2ヶ月間、缶詰状態で現地滞在創作をすることになる。1時間以上のフル作品をイギリスのダンサーたちに振付ける作品創作は大きな魅力だったが、なかなか返事ができないでいた。前回の作品を気に入ってもらえ、もう一度あんな作品を創ってほしい、というオファーだったからだ。嬉しい言葉だし、断るほどの身分ではない。しかし、ビジュアルの提示、振付の雰囲気、内容を話し合ううちに、似たようなものをもう一度創る、ということに刺激を感じなくなっていることに気がついた。未整理なうやむやを抱えたまま、また、図面にむかって複数の劇場空間の制限などと向き合い、彼らの要望にきちんと応え、ツアーをこなせる作品を作る、という目的をうまく果たせるのかという疑問。ともかく頭を空白にして、自己の矢印がどこに向かっているのかを考えてみる必要があった。そこで、イギリスでの作品創作とひきかえに、この旅に出ることに決めた。

近くて遠い海外との微妙な関係

旅といえば公演ツアーだったので、そこでは行かなかった国に行ってみたい。しかし、長期の旅といっても秋からのプロジェクトを考えると2ヶ月が限界。それほど行動範囲は広げられない。そこで、「これまでちょっと足を延ばせば行けるのに機会を逃して行けなかった、自分にとってはあまりなじみのないイスラム教圏の国々」が候補に浮かび、20代のころからずっと行きたかったトルコ、マグレブ地方にフォーカスを絞ることにした。最初はその国のダンス事情も調べよう、と劇場やダンスオーガナイザーに連絡を取ろうとしていた。しかし、肝心の行く先の国からの返信がまったくない。どうしたものかと困りながらも、そもそも明確な計画などない方が見えていなかったことが見えてきていいんじゃないだろうかと考えを変えてみた。目的やルールをつくらない、ダンスは二の次でいい。時間や効率を気にせず、行きたいところに行く。これこそ、この制度でしかできない内容だ。



2009年7月28日に出発、ドイツ、トルコ、チュニジア、ベルギー、スペイン、モロッコ、クロアチアを周り、同年9月25日に帰国。異国間の移動は空路をメインとし、そのほかは電車、バス、交通網があまりないところはタクシーを、とその都度使い分けて行くことにした。ともかくルールをつくらずあくせく、いらいらせず、だ。いわゆる劇場のダンスというフレームから離れて、その国の日常生活をどんなふうに自分が切り取るのか、その国の風に吹かれてみよう、と少し肩の力を抜いていくことにした。

「境界線」の向こうの祝祭

そもそもトルコに興味を抱いたのが、20代のベルリン留学中だった。当時トルコ人街ともいわれていたクロイツベルク地区で触れた食文化、早口に聞こえるトルコ語の会話の調子や身振り手振りがなんとも人間臭くて魅力的だったからだ。しかしベルリンからイスタンブール、それほど遠くもないこの距離が、当時は大イベントに感じられ、足を踏み出すことを禁欲的に控えてしまったものだった。15年後にしてようやく達成。本当はトルコ国内を移動していく旅程も考えていたのだが、イスタンブールについたとたんにその居心地の良さにすっかりいついてしまった。一日5回の祈りを呼びかけるアザーン★1)、次々に出食わす美しいモスク、キリスト教の痕跡を残すモザイク、否応なく歴史の変遷を感じさせる街は圧倒的な魅力を放ち、黙って歩いているだけで、観光名所、郷土料理、旋回舞踊に至るまでなんでも堪能できるようになっている。眠らない街という言葉にふさわしく、新市街ではスリリングな夜の顔が窺え、過不足ない滞在のはずなのだが何かもうひとつ物足りない気がしていた頃、ホテル近くの絨毯売りの青年オクタジーという話し相手を見つけた。

オクタジーは元ガイドをやっていて、イスタンブールを東西文化の融合地、世界の中心だと断言する青年だった。彼の案内で、一人で足を踏み入れるのをやや躊躇していたところに連れて行ってもらうことにした。私は何故か、どの街でも細い路地の入り組んだ場所に強く惹かれてしまうのだ。そこは繁華街の中心タクシムから少し北にいったタルラバシという地区(彼によれば、「農場の始まり」という意味だそうだ)で、90年代以降はクルド人やアフリカからやってきた移民が多く住んでいる場所だという。オクタジーいわく「あの高めのガードレールは通称“バリケード”と言われているんだ。別名“死のボーダーライン”ともね」。唖然とした私に「ブラックジョークさ」と弁解をつけ加えた。夜7時ごろ少し暗くなってくると、さすがに電灯も少ない住宅街はうっすらと治安の悪さを示してくる。無頓着にどんどん進もうとする私にオクタジーのストップがかかる。なにやら騒々しい集団が見えてきた。オクタジーの顔が一瞬曇ったと思ったとたん、音楽が聞こえてきた。即笑顔にもどり「クルド人の結婚式だ。行ってみよう」と、その集団に近付いていく。「昔は無許可の集会は禁じられていたけれど、今は許可されるようになったんだ」とオクタジーの解説。

道端でキーボード1台、エレクトリック・ギターが2台、マイクが2本、ラップのような語りで何かをアジテートするように威勢のよい歌声が聞

イスタンブール:モスクの裏で靴を売るおじさん達、あまり働かずいつも何かを真剣に話し合っている

イスタンブール:楽器屋の前のストリートで行われる音楽演奏

チュニジア、スース:うだるような暑さの人気のないスース

こえてくる。繰り返しの旋律とリズムに合わせて、集団から5人、6人と手を組合いながら列を作り、ひたすら同じステップを踏み、少しずつ移動しながら踊り続け増殖していく様は、ハーメルンの笛吹きを連想させる。シンプルだが見ているだけで身体がゆれてくるような興奮。1時間、2時間、途中で酔ったおじさんや子供たちも入り、乱痴気騒ぎとなってきたにもかかわらず、ステップだけはまるでトランス状態のように延々と繰り返されていく。この騒ぎは結婚式当日まで数日間ずっと続くのだという。時はすでに過ぎ去ったが、今でもあの臨場感ははっきりと頭に思い浮かべることができる。日常に浸透した踊りと歌、しばらくの間ずっと欲していた無防備の興奮だった。もしかしたら、そうした「日常」はまさしくそこここにあるもので、私が目を向けなかっただけなのかもしれない。

チュニジア、ケロアン：メディナの祈りの時間

モロッコ、エッサウィラ：メディナ住宅街の一画

迷宮──メディナを彩る虚構のような現実

チュニジアに来てまず閉口してしまったのが、一人歩きの煩わしさ。要注意と聞いてはいたものの、店先を通過するだけで「狼の群れの中の羊」状態だ。そこから脱するため、繁華街をぬけて、即メディナ★2)へと逃げ込んだ。もちろんここも旅行者を放っておくような環境ではないのだが、物売りのアプローチのほうが若干安心できる。客の注意をひくため、パワー全開となる活気に満ちたスーク★3)を抜けると閑静な住宅街が突然現れる。この緩急のある迷宮、非現実的な世界に吸い込まれるようにして歩いていると、案の定迷ってしまった。そこへ、映画でいえば名脇役にもなりそうな、穏やかでやさしい顔をしている60代近くの初老の男性が歩いてきた。「迷ったなら道を案内してあげよう」、と言う。ひっかけガイドには要注意だが、実際道には迷っているし、彼の独特の素朴な雰囲気への信頼感も手伝って「いくら?」と聞くと「ミントティー一杯をおごってくれればガイド料などいらない」と静かに微笑む。続けて、「私は“ベイ★4)の墓”の管理人で、歴史学者でもある。メディナのことは何でも知っている。知りたいことがあったら聞くといい」、と英語、フランス語を取り混ぜながらオスマン帝国時代の歴代の王や妃の歴史を語り、ベイの墓のみならずメディナのモスク、スークの紹介もしてくれた。歴史学者かどうかはさておき、管理人というのは本当だった。楽しい会話の時間を過ごし、用心も遺跡の管理人なら、とすっかり薄れていた。メディナの出口に到着し、ここで別れようという時に少しはずんでチップを渡すと、急に豹変してわめきだした。ガイド料、それも$500（米ドル、約5万円）を請求してきた。プロフェッショナルな学者の解説だから他では聞けない価値ある内容でこれでも安いと言い張る。ちょっとした案内のチップの相場はD3.000～5.000程度（チュニジア・ディナール、約270～450円）、丁寧に話をしてくれたので感謝はしているがさすがにそれはないだろうと思い交渉しようとすると、「今日の稼ぎの時間を返してくれ!」、と更にヒステリックに大声を上げ泣き出し、周りの住民もこちらに注目しだした。いつかどこかで遭遇する危機への心の準備はあったものの、あまりの豹変ぶりに慌ててしまい交渉などできたものではない。「ユーロなら1枚だけある」、とポケットからそうなった時用に持っていた10ユーロ紙幣をとり出すと彼はそれをさっと手に取り、「わかってくれればいいんだ」とすぐ笑顔に戻り、「シュクラン」といって満足そうに去って行った。呆気にとられたままホテルに戻り、落ち着いてから、自分がこんな典型的な目に合うとは、と、管理人の風貌をおもい出す。たいがいの場合は、顔つきや雰囲気や話し方でわかるものだが、今回は完全に油断してしまった。夜食事に出る前にホテル受付で暇そうにしているおじさんに話し相手になってもらう。曰く、「何を提供するかなんてその場で変化していくし、最初に取り決められてもその通りにはいかないよ」、とあっさり説教を受けた。

交換あるいは対価ということについて改めて考えてしまった。それは車の窓を拭く、とか靴を磨く、コーヒーを運ぶ、などの明確な労働的行為に対してのみではなく、会話や「見る・見られる」というコミュニケーションの中にも存在するのだ。モロッコのフェズで、職人の仕事ぶりを見て回った時も、仕事ぶりを見ていた私にお金を要求した女性の話を運転手にしたところ、「彼女は必要だからやったこと、何も悪意はない」とさらっと言われてしまった。物質的な貧しさやそれを温床とする犯罪の気配、宗教による価値観の違いは、予測はしているものの目の当たりにするとかなりの衝撃を受けることもある。だがそれは、自分の感覚がその場を切り取り、勝手にフレームをはめているが故の衝撃なのかもしれない、とも思う。見知らぬ国にきて、見たこともないレベルの貧しさや異なる価値観に出会う。そのこと自体、旅行者の自分にとっては劇的な瞬間なのだが、彼らにとっては単なる日常だ。それがそれであるように受け止め、衝撃は衝撃として受け止めていく。自分にできることはそんなことぐらいなのだろう。だが衝撃は何らかの変化を生む。ダンスにもそういう衝撃を生みだすことはできるのか、とふと思いながら旅はまだ続いていく。

モロッコ横断とアラーの神、ダンスとダンスの比較級

「お前はなにをやっている?」……「コンテンポラリー・ダンス」……「それはベリー・ダンスより面白いのか?」。こんな会話を運転手ジャマルとしながら遠距離を移動するモロッコ。ベリー・ダンスとの比較に苦しみながらも彼との会話は旅に奥行きを与えてくれた。

モロッコでは様々な地域を見ようと、長距離移動を考えていた。話し相手が欲しかったこともあり、英語が少し話せるアラブ人運転手を雇うことにし、遠くへ移動する際は彼の知り合いがリレーするという交渉が成立した。ちょうどラマダン★5)の中盤から終わりに差し掛かっている時期だったため、観光中心地以外では食事場所を探すのが一苦

労、人々も、日中ぐったりとして仕事にならない様子だったり、日陰に座って暑さをしのぎながら静かにコーランを読んだり、とそれぞれにエネルギー消費を控えているように見えた。ジャマルももちろん、日が落ちるまで水一滴のまず、長距離移動中は、コーランの内容のすばらしさやアラーの神について、そして断食達成の意欲について熱く語っていた。イスラム教への信仰を何度も勧めてきたが、そうやって自己を鼓舞して達成しようとしていたのかもしれない。ジャマルとの会話にも慣れてきた旅の中盤戦、ワルザザードに向かう途中、川の氾濫に遭遇した。よくあるらしいが、まさか自分が遭遇するとは思っていなかった。自分たちの車の高さでは転倒する可能性があるから川の水が引くまでまたなければならない、という。仕事に出る人、商品を運ぶ人、買い物に出る人、皆立ち往生して困っている。面白がって野次に出てきていた子供たちも水浸しになった道端で退屈し始めた頃、大型トラックが何台か川を渡りだすと、誰もが水位を計ろうと再び人だかりができ、渡りきったところで歓声があがる。ジャマルが苛立っているのが伝わってきた。「臆病だからじゃない。この仕事が好きだから失いたくない。お客の安全が第一の仕事」といった数分後、「いちかばちか渡ってみたいか?」と聞いてきた。「私には経験がないから判断できないし、別に急いでいないよ」というと、またしばらくして「行きたいか?」と聞いてくる。「運転のプロにまかせるよ」とひとこと言うとジャマルは戦闘顔になりエンジンをかけてゆっくりと進み始めた。「水位を良く見て、トランクに水が入りそうだったらすぐ教えて」と言われ、左右に揺れる車内から水面を凝視する。数分の出来事がとても長く感じられた。対岸に到着するや否や、向こう岸から歓声が上がり次々に普通車が渡り始めた。と同時にジャマルが興奮してアラビア語で大声で何かを叫んでいる。「アラーの神に感謝を! 勇気をくれたお前にも感謝を!」という意味だったそうだが、びっしょり汗だくでのジャマルの興奮はしばらく止まず、そのあともずっとハイテンションで話し続けていた。そんなに恐怖心があったとは予測していなかったので後から怖くなるほどだったが、苦難達成直後に出てくる言葉、自分は何に感謝をしようかと真剣に考えてしまった。

ベルベル人の運転手に交代しアルジェリアとの国境近く、メルズーガの方へと移動した時のこと、街と街との間隔が遠のき、変化のない景色を見ながら、ここらへんに劇場ができたりする日がくるのかなあ、とこの土地の未来を考えてしまった。モロッコではマラケシュのエル・フナ広場、エッサウィラのグナワ音楽の祭典をはじめ、パフォーマンス、ダンス、音楽と、ストリートでのエンターテイメントが充実している。砂漠ですら、テントからベルベル人の太鼓の演奏が聞こえてくる。生活に密着した音楽とダンスは圧倒的にパワフルで、したたかで、スリリングで、劇場で見る準備されたダンスなど嘘くさくてちゃんちゃらおかしいのかもしれない。彼らを前にしては、自分が何をしているのか誇りをもって語れるかどうか、何度も自信を失いかけた旅でもあった。

さて、そんな自問自答も砂漠の彼方に消え入ってしまうかのように、風景は一向に変化なしだ。メディナやスークもなく、茶色いはげ山を見ながら、ようやく遊牧民のベルベル人たちのテントをみつけて、人の気配にほっとする。彼らが何語を話す何民族なのかは正確にはわからないが、車から降りて遠慮がちにこっそりと様子をうかがっていると、しばらくして手招きし、テント内でおばさんがミントティーを入れてくれた。会話は全く成立しないが、何かを見たり聞いたりするたびに報酬を要求する交渉の嵐をうけていたせいか、ここにはひっそりとした静寂の中に深い安堵感があった。サービスを仕事にしようとする作意があまりない地域なのか、それともこれから変化していくのか、マラケシュ、フェズなどの都市とは全く異なる、砂と風が支配する世界の落ち着きを呈していた。

キーフ、ハシーシュ、ダンス?

2ヶ月間の旅の間結局何をみてきたか、そしてそれらが自分にどのような影響を与えたのかについては実際まだ整理がついていない。ハイエナのように集まってくるガイド、物売り、大道芸パフォーマー、音楽の演奏者、職人たちといった人々の働きぶりと生活の必然による行動の、現実と虚構の境目がほとんどないような状態に苦笑しながらもそれらは皆あっぱれ、と思うほど堂々と何かを物語る身体たちだった。狡猾な駆け引きと、音として過剰にあふれ出る言葉、絶妙な演技とも思える情動表現とグルービーなビートとトランス。言語化できない、どんな感情なのかもわからない、身体の強い訴え、これは、私のダンスのルーツの始まりなのだ。

いろいろなところで書いているのだが、私のダンスのルーツは父の酔っ払いの地団太ダンスだ。父は少なからぬ酒飲みであり、酔うとどこからか怒りのマグマがわきあがり、体中から噴出した。酔っ払って最初は怒鳴っているだけだった身体が、徐々にその反復と共に身体が高揚し、地団太を踏みながら、腹の底からどなり声を響かせる。その地団太の踏まれるリズムに見いってしまったのが、おそらく私のダンス発見の始まりだ。強烈に興奮して怒っているので、本来怖いはず

メルズーガからトドラへの途中の川の氾濫

ミデルト〜メルズーガへ向かう途中：ベルベル人のテント

ミントティーを提供してくれたベルベル人のおばさん

チュニジア、チュニス：メディナでの結婚式で得意げに踊る少女

なのだが、本人は怒っているのに、身体は滑稽な格好とラップのように怒鳴り声と妙にマッチしたリズムを奏でているのでおかしくてたまらない。感情とはまた別の、身体だけが物語ること。旅の間、先ごろ亡くなった父の奇天烈な行動を思い出したのも、全くの感傷的な気分からだけではなかったと思う。

こんなものに出会ったあとでは、ベルベル人たちの遊牧民族の生活、そして荒々しい自然すら、もしかすると虚無を演出している背景のひとつなのでは、と疑念を抱くこともあった。ほとんど思い込みの病気である。

自分がこれまで執着してきた劇場でのダンスから離れ、目的を持たない旅をする、とは言ったものの、気がつくと様々な状況で人々のとる行為に自分勝手なフィルターをかけ、身体という誰もが持つ共通のメディアを介した、妄想の物語を繰り返し楽しんでいた。矛盾するようだが、もしかするとダンスに関わることがなければ、他国の日常生活にこれほど強い興味は湧かなかったかもしれない、と思う。ダンスに関わることで徐々にフレームを狭めていく自分がある一方で、ダンスに関わるからこそ好奇心が四方八方に広がっていき、様々なところにフレームを置いてみる、という自分もある。ダンスは二の次、といいながらも、なにかと日常生活のそこここに浸透した身体の表現に目が行ってしまい、身体が物語るさまざまなものごとを勝手に読み取る自分の行為自体、まったくダンスというフレームから離れることができなかった、ということになるのかもしれない。この旅の間も首尾一貫して劇場から離れていられたわけではなかった。ドイツやクロアチア、ベルギーでは反動のように劇場に「見だめ」をしに通ってしまった。スペインアンダルシアでは、フラメンコや音楽ライブにオアシスの水を求めるがごとく、足繁く通ってしまった。

さて、旅からもどるといろいろとやらなければならないことがあった。まず、カンパニーとしての活動は停止し、2010年4月にむけてソロ活動を開始する決意をした。長い間戦いを共にしてくれた制作や旧知のダンサーのダンスに対する気持ちや環境の変化もあり、これ以上固定メンバーを無理に存続させていくことに意味を感じられなくなってしまったことと、自分自身、新しい世界に足場を移してみようという欲求を感じ始めていたからだ。ダンスなど、たぶんどこかで病的に感染でもしていないかぎり、継続していく上で無理が生じてくるものなのだ。これまであるものを打ち壊すのは楽な作業ではないし、一人になることに不安がないと言えば嘘になる。しかし、ソロになるということで幅が狭まるのではなく、より自由な活動領域を得ていきたいと思う。むろん、ソロ活動といっても、これまでカンパニーで創作した作品の上演は機会があれば積極的に行っていくし、新たなダンサーとの出会いを求めながら共同作業も行い、グループ作品も作っていきたい。そしてまた様々な形で、ダンスを生み出していくための制限との戦いを苦しみ・楽しんでいきたいと思う。私の内面においてひとつこれまでと大きく異なることといえば、自らの身体ともう一度真剣に向き合いたい、という欲求が生じてきたことかもしれない。これまでの10年は、振付や演出への執着が強く、自己のダンスは二の次、まずはダンサーといかに共同作業をしていくか、ということに専心していた。旅を通して圧倒的な身体の堂々とした存在感に感化されたのかもしれない。それがどのような形になるかはまだ定かでないのだが。

ダンスは麻薬である。そしてその麻薬におぼれる身体はほとんど病気である。ドゥルーズに従えば、健康なだけでは十分ではないのだ。きっと、ダンスは病の中で身体を発見する体験なのであり、不健康ではなく、非＝健康的な身体を通して生を見出す運動なのだ。もちろんそんな薬漬けのような生活からきれいさっぱりと足を洗うことも選択肢にあったかもしれない。しかし、この旅の経路のせいか、キーフ、ハシーシュ★6)、ダンス……と並び連ねてしまいたくなるように、私とダンスの旅はまだまだ続くことになりそうである。

編集部註

1) イスラム教における礼拝（サラート）への呼び掛け。
2) 旧市街地。迷路状の市街地は、中世イスラム都市の特徴。
3) 商業地区。市場。
4) オスマン帝国建国の王、オスマン・ベイ。
5) ヒジュラ暦の第9月。この月の日の出から日没までの間、イスラム教では断食を行う。
6) キーフ、ハシーシュともに、大麻の種類。

photo: Jun Kurumisawa

北村明子（きたむら・あきこ）

振付家・ダンサー、信州大学人文学部准教授。早稲田大学入学後、Leni-Basso結成。1995年文化庁派遣在外研修員としてベルリンに留学。01年Bates Dance Festival（USA）、03年American Dance Festival（USA）に参加。ADF委嘱作品『Enact Oneself』はThe Independent Weekly紙、ダンス・オブ・ザ・イヤーに選ばれる。01年代表作『finks』は欧州、アジア、北南米、多数の都市にて上演、モントリオールHOUR紙2005年ベストダンス賞を受賞。05年ベルリン「世界文化の家」の委託作品『ghostly round』は各国で上演し絶賛を得る。ACE Skin Project（07）（UK）、Artzoyd（France）、『KAIRO』（09）への振付・出演など海外活動、他ジャンルへの振付も意欲的に行う。10年からソロ活動開始。11月Artzoyd主催『The Black Particles』への振付・出演決定。他11月松本市美術館でのイベント企画。11年ソロ企画、またアジアとの国際共同制作企画を準備中。

http://www.akikokitamura.com

MORISHITA STUDIO REPORT

CI Festival Japan 実行委員会

『コンタクト・インプロビゼーション・フェスティバル・ジャパン 2010』

2010年3月14日—20日　A・Cスタジオ

勝部ちこ氏が主宰を務めるCI Festival Japan実行委員会主催による、3年目を迎えた'CI Festival Japan 2010'は、3月14日のプレフェスティバルに始まり、3月15日〜20日の'Week 1'を東京・森下スタジオにて、3月23日〜28日の'Week 2'は、神戸・旧グッゲンハイム邸とArt Theater dB神戸にて開催。様々な切り口からのコンタクト・インプロビゼーション（以下CI）を追求するワークショップ（以下WS）に加え、今回はボディワーク、トライアルクラス等、実行委員会や海外からの講師によるWSで構成し、より実践的なプログラムとなった。また、全てのWSが通訳をおかずに開催されているのも、フェスティバルの参加者に、できる限り国際的な感覚を身につけてもらえればという思いが込められている。3年間の試行錯誤を経て、こうしてプログラムの充実も図られ、森下スタジオでは連日多くの参加者で賑わった。

東京・神戸共に、最終日にパフォーマンスが催されたが、森下スタジオで20日に開催された講師・メンバーによる「インプロビゼーション・パフォーマンス」は、途中休憩を挟んで、2部構成の約2時間。エスニック・サウンドスケープ・ユニット'マニャン'の生演奏と照明・ダンサーとの完全即興コラボレーションを、アーティストも観客も一体となって楽しんでいた。時に観客を巻き込み、時に緊張感を張り巡らせ、アジア、欧米……多国籍のインプロパフォーマー達のエキサイティングなセッション。公演終了後には、会場をWSの空間に戻し、フェスティバルの参加者だけでなく、パフォーマンスを観劇して自らも踊りたくなった観客も参加してインプロビゼーション・ジャムが行われた。

10年前の日本には、まだ馴染みの薄かったCIが、このように広がり、発展してきた功績は、勝部氏らその普及に努めるアーティストたちが、地道に活動を続けてきたことに負うところが大きい。フェスティバルは今回でひと区切りとなるそうだが、次のステップがどのようなものになるか期待したい。

（M+U）

ワークショップの様子　Photo：片岡陽太

戌井昭人

『ウィリアム害虫駆除野郎』試演会

2010年4月23日—25日　Cスタジオ

戌井昭人氏（08〜09年、当財団ジュニア・フェロー）による作・演出作品の試演会が、3日間・計3ステージ行われた。口コミ・評判が広がって、来場者は初日85名、中日120名、千秋楽155名、と日々増加。戌井氏への注目度の高さが表れていた。

出演は、戌井氏主宰パフォーマンスグループ'鉄割アルバトロスケット'所属の中島朋人氏、映画俳優の宇野祥平氏。個性的な二人の競演に、客席からは笑いと温かいリアクションが。また、多方面で活躍中のスタイリスト・伊賀大介氏が衣裳を担当したのも話題。

公演初日の約2週間前から、Aスタジオにて稽古を始め、3日前に、公演会場となるCスタジオに移り、リハーサル開始。本番では、戌井氏が音響オペレーターも務めていた。荒削りではあるが、作者の視点、創作の魅力を存分に伝えていた作品。ダンボール・ゴザ等を使用し、Cスタジオが'芝居小屋'空間に。その独自な'戌井ワールド'に、自らも同化する人、面白がる人、戸惑う人等、観客は、それぞれの楽しみ方を享受していた。

戌井氏によれば、今回はこれまでの作品の中で最も長い話。しかも大所帯の"鉄割"から切り離した少人数での上演は、初の試みとのこと。まさに「試演会」と呼ぶべきものだ。「最も長い」とはいえ約50分の上演に、客席からは「短いぞ〜」との声も…。それは「もっと続きが観たい!」という声援とも受け取れ、観客からの期待が感じられた。

（M）

『ウィリアム害虫駆除野郎』　Photo：沼田 学

viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第51号
2010年6月10日発行
編集人：片山正夫
発行所：財団法人セゾン文化財団
〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F
Tel: 03-3535-5566　Fax: 03-3535-5565
URL: http://www.saison.or.jp
E-mail: foundation@saison.or.jp
●次回発行予定：2010年8月末　●本ニュースレターをご希望の方は送料（90円）実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。